

幼小連携のあり方に関する考察 —小学校向け授業プログラムの保育実践への応用—

An Inquiry of the Desirable Relation between Early Childhood and Elementary Education—Applying Elementary School Program to Early Childhood Care and Education—

阿部 学
ABE Manabu

要旨 いわゆる「小1プロブレム」として指摘されるような課題に対しては、現在、様々な取り組みが行われている。たとえば、幼稚園で行われている遊び中心の活動が、小学校以降の教科とどのように関連しているのか解釈してゆく取り組みがある。しかしながら、そうした取り組みは、小学校の教育方法や教育内容が妥当なものであるという前提に立った議論におちいってしまう。本稿では、私立A幼稚園における「しんぶんしゃ」の「活動」を取り上げ、別の角度から幼小連携のあり方について考察する。「しんぶんしゃ」の「活動」においては、子どもたちが本格的な新聞をつくろうとしていたところに、普段は小学校向けの授業プログラムを実施しているプロの新聞記者が介入した点に独自性がある。実践についての考察から、幼稚園と小学校の連携を考える際には、教科中心の連携を考えることに加え、幼稚園と小学校それぞれが実社会とつながった活動をしているか、という観点をもつ必要があることが示唆された。

1. はじめに

いつの時代も、様々な教育問題が指摘される。いわゆる「小1プロブレム」として指摘されるような、幼稚園と小学校との接続に関する議論すなわち幼小連携¹⁾についての議論もそのひとつである。

「小1プロブレム」とは何か。森上(2008)によれば、「小1プロブレム」とは、「小学校に就学した1年生が、授業中に立ち歩きや私語、自己中心的な行動をとる児童によって、学級全体の授業が成り立たない現象」であり、「かつては学級崩壊の一種と考えられていたが、学級崩壊は形があるものが壊れるのであり、小1プロブレムの場合は、集団がいまだ形成されていないので学級崩壊とは異なるものとしてとらえられるようになった」という。「小1プロブレム」は、幼小間の接続固有の問題として語られなければならない。

この問題の難しさは、「小1プロブレム」として語られるような現象は確かに起こっているが、その原因は何なのか特定できないということである。たとえば、「幼稚園において遊びを中心とした教育を受けた子どもが、(中略)小学校に上がったとたん机を前にじつと椅子に座り、「教師：指示する人」、「子ども：それを静かに聞く人」型の一斉授業にリセットされてしまい混乱を引き起こした」(佐々木、2004)という考え方もできれば、「早くから塾などに通い幼児期に十分な遊びの機会を与えられなかったため、自分で好きなことを見つけて何かにじっくりと集中することができない」(佐々木、2004)子どもが増えたという考え方もできてしまう。あるいは、「群れやけんかといった人間関係を学ぶ体験が希

薄で、ゆったり甘えることが満たされなかった子どもが、幼児のようにスキンシップを求めている」(上野、2007)という考え方もできる。また、佐々木(2004)の言葉を借りれば、「あとはお任せ」の幼稚園と、「0からの出発」の小学校との連携不足が影響しているとも考えられる。特定のカリキュラムがなく、どちらかという子どもひとりひとりに寄り添った援助をしてゆく幼稚園と、決まった指導計画にそって一斉に授業をしてゆかなければならない小学校との間に、子どもをみる観点の違いがあるということだろう。それ以外にも、家庭環境や地域コミュニティなど、様々な要素が影響していると考えられる。このように、「小1プロブレム」が引き起こされる原因を特定するのは難しい。

それでも、幼小の接続に、実際に問題があると解されている以上、われわれは何かしらの方針を定め、取り組みを行ってゆかねばならない。実際には、どのような取り組みが行われているのだろうか。

ひとつの方法²⁾として、幼稚園で行われている遊び中心の活動が、小学校以降の教科とどのように結びついているのかを探ってゆく方法があるだろう。佐々木宏子・鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園(2004)『なめらかな幼小の連携教育—その実践とモデルカリキュラム』では、そうした取り組みが紹介されている³⁾。たとえば、伝えたい事柄があったときに、それを文字で表そうとすることが、国語科と関連すると考察していたり、パズルの片付けに苦勞することが、算数科の図形の単元と関連すると考察していたりする。あるいは、生き物とのかかわりの中での気付きを、理科と結び付けて考察するなどしている。こうした取り組みは、幼稚園で行われている活動を、既存の教科の枠組みの中に当てはめて解釈してゆく仕方である。

園長の佐々木(2004)は、こうした取り組みを、「小学校の教科学習の「下請け」のようになされてしまうのではないかと懸念したというが、幼小間の相互理解を促すためには重要だと考え、実行したと言う。佐々木の言うとおりに、こうした取り組みには、ある程度の意義はあると言えるだろう。幼稚園側からすれば、小学校で学ぶ内容と日々の保育とのつながりが理解され、入学後を見越した援助を、これまで以上に行ってゆけるようになるかもしれない。あるいは、自分たちの行っている保育が、小学校で学ぶこととまるで関係ないものではないのだと、自信をもてるようになるかもしれない。小学校側からすれば、幼稚園で行っていることが単なる遊びなのではなく、自分たちがこれから教えようとするの下準備とも言える活動を行っているのだと理解できるようになるかもしれない。

2. 問題と目的

しかしながら、こうした取り組みに一定の意義があることを認めた上で、さらによく考えてみたいことがある。

先にも記したが、こうした取り組みは、幼稚園で行われている活動を、既存の教科の枠組みの中に当てはめて解釈してゆく仕方である。つまり、小学校で学ぶ事柄や、小学校での学び方が、望ましいものであるという前提に立った上での取り組みということになる。はたして、そうした考えは妥当なものなのだろうか。もちろん、小学校のあり方を全否定するつもりはない。しかし、可能性として、望ましい幼小連携のあり方について考えてゆくためには、小学校の教育方法や教育内容自体から、再検討してゆかなければならない可

能性もある。実際、小学校以降においても、キャリア教育の推進やコミュニケーション能力の育成、学力向上など、様々な課題が指摘され、これまでとは異なった実践を創造してゆくことが求められるようになってきている。幼稚園と小学校、双方の実践を同時に見直してゆくのは難しいだろう。しかし理想としては、幼小連携の議論は、小学校での学びのあり方は妥当なのかという議論と包括的に考えてゆかねばならないものである。そういう方針で考えたときに、たとえば、幼稚園的な学びのあり方を小学校でも継続した方が望ましいとか、幼稚園も小学校もどちらのあり方も根本的に変えてゆかねばならないとか、そうした結論にいたる可能性もあるだろう。

本稿では、以下、多様な議論を促すことを目的に、ある幼稚園の実践を取り上げて考察をしてゆく。

この幼稚園は、千葉県内にある私立 A 幼稚園である。A 幼稚園の実践は、いわゆる自由保育の理念にもとづいていることもあり、様々な要素が複雑に絡み合って可能となっている。「おうちづくり」、「メディア遊び」、「園通貨」の使用など、子どもの「活動」⁴⁾ 自体にも独自のものがみられる。しかし、A 幼稚園の教員である新垣（2006）によれば、その実践の意義は、教員間で明示的に共有されてはいない。A 幼稚園においては、実践の進め方や保育者のあり方といったことは、「身体化」（新垣、2006）という形で、非明示的に保育者らに共有されている。そのため、様々な実践の前でその都度立ち止まり、実践をエピソードとして描き出し、その意義について改めて議論するということが求められることになる。そうした課題の下、A 幼稚園の実践は、これまで様々な角度から論じられてきた（たとえば、新垣、2006、2008；阿部、2009a、2009b、2010）。しかし、A 幼稚園の非明示的なカリキュラムを構造として理解するには、まだ多くの議論が必要であることが、それぞれにおいて示されている。

そうした背景の下、本稿で取り上げるのは、2009 年度に年長クラスで行われた、「しんぶんしゃ」の「活動」である。ここでは、なぜこの事例を取り上げるのかについて、簡潔に述べたい。A 幼稚園では、新聞社やテレビ局の再現など、メディアを活用した遊びが例年行われている。2009 年度にも数名の子らが、「しんぶんしゃ」の「活動」を行うこととなったが、例年と異なるのは、途中、プロの新聞記者が「活動」に介入したことである。

プロの新聞記者が介入した経緯は、簡潔には以下である。

筆者は、企業と連携した授業づくりを行う NPO 法人企業教育研究会⁵⁾ で理事をつとめている。NPO 法人企業教育研究会は、千葉大学教育学部授業実践開発研究室のメンバーが中心となり、2003 年に設立された NPO である。企業と連携しながら、小学校以降を対象とした授業プログラムを作成し、全国各地で出前授業を行うのが、企業教育研究会の基本的な活動内容である。そのプログラムのひとつに、読売新聞社と連携した「ことばの授業」⁶⁾ というものがある。プロの新聞記者が教室へ出向き、インタビューの仕方、メモのコツ、記事の書き方などを直接指導し、子どもたちの言語技術を育成しようとするものである。中心的なプログラムである「インタビューをしよう！」⁷⁾ は、基本的には小学校 3 年生以上を対象としている。

「しんぶんしゃ」の「活動」を参与観察していた筆者が、その活動の高度さに驚き、もししたら「ことばの授業」のプログラムを応用して、何かしらの指導ができるかもしれないと考え、読売新聞社の担当者（当時）に依頼をしたのが、介入のきっかけである。

したがって、この実践は、先に挙げた、幼稚園で行われている活動を既存の教科の枠組みの中に当てはめて解釈してゆくという取り組みとは異なっていると言える。幼稚園の方ですでに、小学校並だと少なくとも筆者には思われる活動をしており、そこに小学校で行っているプログラムを応用することで、幼稚園側の実践がさらに発展するだろうという仮説から行われたのである。幼稚園の実践が小学校でいどの単元に当てはまるかという考え方によるものでもなく、小学校での学習内容をいかに幼稚園で先取りできるかという考え方によるものでもない、独自の考え方である。これは、幼小連携を考えてゆくためには幼小双方の学びのあり方について包括的に考えてゆかねばならない、という先の仮説を検証する上で参考になるものだと言える。独自の実践であるがゆえ、一般化するには困難がともなうが、幼小連携のあり方を再検討するために、取り上げることにする。

3. A 幼稚園の概要

実践について理解するためには、A 幼稚園の特徴について把握しておく必要がある。実践を取り上げるに先立って、可能なかぎり A 幼稚園の概要を記す。

A 幼稚園では、いわゆる自由保育⁸⁾の理念にもとづき、多くの時間を子どもたちの自由な遊びの時間にあてている。近年、各学年は2クラスずつで構成されることが多いが、2クラス間を区切る壁はない。壁がないことにより、子どもたちはクラスの枠を超えて自由に保育室内で遊ぶことができる。また、他学年の保育室や園庭で遊ぶことも基本的には認められている。子どもたちは、自分の好きな場所で、思い思いにやりたい遊びを選択している。

その一方で、すべての時間を自由な遊びの時間としているのではなく、一斉的な活動や、課業的な活動も不定期ではあるが、必要に応じて行っている。よって、A 幼稚園における自由保育の捉え方は、「一斉的活動形態もその中に含んだ自由保育」(新垣、2006)ということになる。

そうした保育形態において A 幼稚園が目指すものは、子どもたちの「活動」の深まりである。子どもたちが、自分の追求したい「活動」を見つけ、その「活動」を深めてゆくことが望まれている。

A 幼稚園では、上記のような理念にもとづき実践が行われているが、子どもの「活動」自体にも、独自のものが多くみられる。象徴的な例を1つ挙げてみよう。A 幼稚園では、年長の子どもたちが、保育室内に「おうち」を建てるという「活動」をするのが伝統となっている⁹⁾。多くの子は、年少・年中の頃に「おうち」の建ち並ぶ年長の保育室で遊んだ経験から、自分も年長になったら「おうち」を建てられるということを暗黙のうちに理解している。そのため、年長になると、子どもの方から「おうちを建てたい」という要望が出されるようになる。基本的には、子どもたち自らが釘と金槌を使い、試行錯誤しながら「おうち」を制作することになる。「おうち」を建て始めるきっかけや、「おうちづくり」の展開の仕方は、その年によって様々であるが、子どもたちが建てた「おうち」は、最終的には「おみせ」としての機能を持つようになる(図1)。たとえば、「おうちづくり」とは別に行っていた「アクセサリづくり」と結び付き、「アクセサリ屋さん」となる、といった具合である。そして、「活動」が深まる2学期の中盤以降、年長の「おみせ」での「活動」

は園全体を巻き込むようになってゆく。しかるべき時に使い始められる「園通貨」¹⁰⁾の存在もあって、園をあげての「お買い物ごっこ」も行われる。年少・年中の子が「園通貨」を握りしめながら、積極的に年長の保育室へ買い物に訪れるようになると、それに影響され、年長の「おみせ」は、より本格的なものを志向するようになる。また、そうした「おみせ」の発展が、年少・年中の子に改めて刺激を与えてゆくことにもなる。このように、A 幼稚園では、「おうち」を基盤としながら、年間をとおして、子どもの「活動」が展開してゆく。

このような A 幼稚園独自の実践の意義については、新垣（2006、2008）や阿部（2009a、2009b、2010）がその一端を示している。議論を進めるには、A 幼稚園の全体像を可能なかぎり理解しておく必要があるが、分量の都合上、詳しくはそれぞれの文献に譲る。



図1 「おみせ」の建ち並ぶ年長の保育室

4. 「しんぶんしゃ」の成り立ち

ここからは、2009 年度に行われた「しんぶんしゃ」の「活動」をエピソードとして記述する。筆者は、2009 年度は平均して週 2～3 回程度の参与観察を行った。以下に記すのは、参与観察の記録や、保育者らとの打ち合わせなどをまとめたものである。なお、筆者は 2008 年度より継続して参与観察を行っている。そのため、園の関係者とは独自の関係が気付かれている。そうした経緯については、阿部（2009b）を参照されたい。

「しんぶんしゃ」の「活動」を追う前に、A 幼稚園における「メディア遊び」と、「A（幼稚園の名前）TV」の「活動」を紹介しなければならない。

新垣（2006）によれば、A 幼稚園で初めて「メディア遊び」が行われたのは、2002 年度である。初めて行われたという意味は、保育者が、その遊びはメディアを中心的に扱った「活動」すなわち「メディア遊び」だと、そのとき初めて認識したということである¹¹⁾。そのときは、年度も終盤となった 2 月下旬頃、年長のある子が「ニュース番組をつくりたい」と言い出した。ビデオカメラを使う「フリー」¹²⁾の保育者の姿を頻繁に見ていた子が、そのカメラで自分がニュース原稿を読み上げる様子を撮影してほしいと願い出たのである。その後、子どもの希望どおり、原稿を読む姿を撮影するという「活動」が行われたが、卒園間近だったこともあり、それ以上の発展はみられなかった。しかしながら、

保育者間では、子どものメディアに対する興味関心の高さが理解され、そうした「活動」の可能性が意識され始めた。

2009年度は、5月ころから「メディア遊び」が見られるようになった（阿部、2009a、2010）。子どもたちは、ビデオカメラを使い、ニュースを読む姿（図2）や、ステージで行うショーなどを撮影していた。子どもたちは、この「活動」あるいはこの「活動」を行う場所を「A(幼稚園の名前)TV」と名づけ、継続して活動が続けた。そして、「ATV」の「活動」が進むにつれ、様々な番組がつくられるようになった。子どもからは、ドラマ、CM、グルメ番組、アニメをつくろうといった声が挙がっており、実際にはグルメ番組とアニメがつくられることとなった。保育者がビデオカメラの使い方を教え、自由に使ううちに、子どもなりに苦労しながらも、番組を録画することができるようになった。また、録画以外にも、ニュースを読む姿をビデオカメラで撮影し、そのままプロジェクターから壁に投影するという仕方で、「生放送」も行っていた。2学期になると、「ATV」の「おうち」も建てられ、「活動」がさらに発展していった。

すると、子どもたちから、「新聞のうしろのテレビ欄知ってる?」「フジテレビとかNHKとか時間がかいてるやつでしょ」「ATVにもテレビ欄ほしいよな」という声が聞こえるようになった。2学期に入り間もない頃である。そのうちに、数名の子らが自主的に新聞をつくりだした。A幼稚園では一斉的に文字を教えることはしておらず、子どもたちは新聞を書きたいとは思っているものの、非常に苦労しながら作業していた。それでも、保育者からもらった五十音表を見たり、どうしても書けない部分は保育者に手伝ってくれるようお願いしたりしながら、新聞を書き上げていった。最初に制作した新聞を図3に示す。図3にあるように、最初の新聞は、テレビ欄のみで、記述もまばらであり、しかもテレビ局の概念も曖昧だと解されるものであった。それでも、子どもたちは新聞を書くという行為が楽しかったのか、その後も制作を続けていった。文字を書くのが比較的に苦手な子も、まわりの子や保育者に教えてもらったり、自分で五十音表を見て探したりと、積極的に取り組む姿がみられた。また、すぐに「しんぶんしゃ」の「おうち」が建てられ、文字を書く場所が確保された。「おうち」に籠り、ライトをつけ、必死に文字を書く姿は、さながら本物の記者のようだと筆者には感じられた。

その後、中心的に新聞制作を行っている子を中心に、「今日うれしかったことは何ですか?」「今日おもしろかったことはありますか?」と、取材活動をする姿が見られるようになった。新聞制作を援助していた保育者と子どもの会話から、次からは取材活動をしてみようという話になり、子どもたちが自作の「メモ帳」(図4)を片手に園中をまわるようになっていったのである。保育者には、子どもらが取材活動をしたら面白いだろう、という思いがあったようだが、決して強制したわけではなく、あくまで子どもらが乗り気になって行い始めたのである。

取材活動をするようになってから、子どもらの新聞は、テレビ欄だけでなく、お知らせしたいことや天気予報が掲載されるなど、より新聞らしくなっていった(図5)。どういったコーナーがつくられるかは、その日の気分によっていたようだが、人に話を聞いたり、自分で調べたりしたことを記事にするということが、子どもらの間で、当たり前のこととして共有されていった。一日のわずかな時間の中で新聞を書き上げるのは容易でなかったため、数日に一度の発行ではあったが、子どもらはそうしたことは気にせず、目の前の新

聞を完成させては次の取材を行う、ということを繰り返していた。



図2 「ATV」での撮影の様子

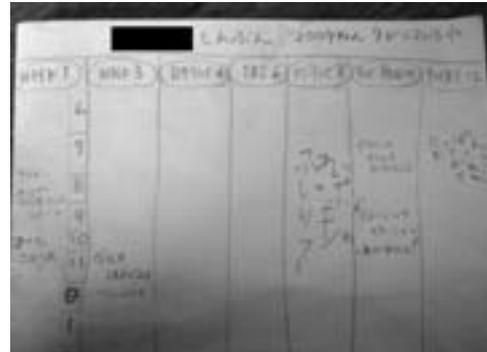


図3 最初に制作した新聞

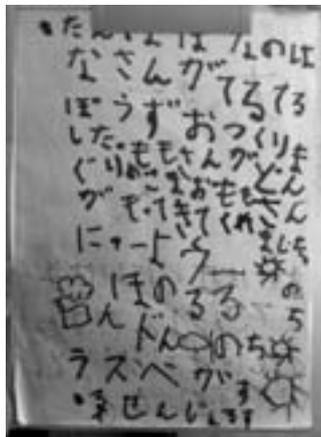


図4 子どもが使用する「メモ帳」



図5 取材活動をするようになった後の新聞

5. 「しんぶんしゃ」の発展

「しんぶんしゃ」の「活動」は、興味のある数名の子らによって続けられた¹³⁾。さらに、11月になるころ、ある特定の子が、新聞制作に関するアイデアをたくさん思い付いたことによって、「活動」が大きく発展していった。

その子のアイデアとは、(1)「新聞のマークみたいなのがいる」、(2)「新聞の下にあるのは何?」、(3)「本物は、いっぱいめくるようになってる」といったものであった。(1)は、「○新聞」というロゴのことを指している。(2)は、新聞内にある広告のことを指している。広告を自分たちの新聞にも取り入れようという主張である。(3)は、自分たちの新聞は1～2ページしかないが、本物の新聞のページ数はもっと多いということを指摘している。その子は、自分たちの新聞も、本物の新聞にならって、上記の項目を取り入れようという主張をした。こうした主張は、保育者から促されたものではなく、ある日突然、この子自身がつぶやくように言い始めたことである。新聞制作が進むにつれ、自分たちの新聞と本物の新聞との違いに気付くようになったのだろう。こうした主張を受け、「しんぶんしゃ」

のメンバーや保育者ら「活動」にかかわるメンバーで協力し、ロゴをデザインしたり、他の「おみせ」から広告をもらったり、ページ数を増やしたりするようになった。ひとりの特定の子のアイデアから、新聞がさらに本格的なものとなっていったのである（図6）。

この例において留意しておきたいのは、どの子でもこうした高度な内容に気付くことができたかという点、そうとは言えないということである。今回は、言わば勘のするどい特定の子が、様々なことに気付くことができていただけである。ものごとの理解の仕方にも個人差があるということは押さえておかなければならない。ただし、今回は「しんぶんしゃ」というチームで活動していたこともあり、チームのメンバーが課題を共有し合い、結果として他の子らも、新聞のあり方について理解を深めてゆくことができた。



図6 レイアウトの変わった新聞（変更初期）

6. 新聞記者の介入

筆者には、幼児の活動が、ごっこ遊びと呼ばれるような、幼児としての遊びの枠に留まらない高度なものであると感じられた。そこで、NPO 法人企業教育研究会が読売新聞社と連携して実施している小学校以降向けの授業プログラム「ことばの授業」の内容を、保育に応用できないか考えた。

「ことばの授業」は、読売新聞の記者が学校現場へ出向いて、言語技術について指導する出前授業であり、いくつかのプログラムから構成されている。たとえば、「インタビューをしよう！」¹⁴⁾というプログラムがある。このプログラムは小学校3年生以降を対象としている。授業の流れとしては、まず新聞記者が、その場でインタビュー取材をする様を見せ、インタビューのコツやメモの取り方などを教え、その後、子どもたちが、保護者や地域の方へのインタビューに挑戦するというものである。インタビューのコツとしては、「みんなが興味をもちそうなことをみつける」、相手の話した内容に「つつこむ」といったことなどがある。メモのとり方としては、きたなくても自分が読める字で素早く書くといったことがある。

筆者には、「しんぶんしゃ」の「活動」と「インタビューをしよう！」のプログラムが、

大いに関連すると思われた。子どもらは継続的に取材活動をしているものの、その取材の仕方は、一問一答形式になりがちであった。メモについても、丁寧に書こうとするあまり時間がかかりすぎていると感じられた。もとは小学校3年生以上を対象としたプログラムであるため、幼児には難しい内容かもしれないが、応用の仕方によっては、「しんぶんしゃ」の「活動」を発展させるよい刺激となるだろうと期待をもっていた。

その後、幼児を対象に話をするということについて、読売新聞社の担当者 K 氏から快諾をいただいた。そして、どのようにプログラムを応用すべきかについて、筆者が中心となりながら相談してゆくこととなった。

はじめに筆者が考えたのは、小学校向けプログラムを、ほとんど形式を変えずに実施するという案であった。小学校のように机と椅子を用意し、全員がインタビューとメモを体験するという案である。高度な「活動」をする幼児の姿を前にして、形式を変えずとも実施が可能なのではないかという期待をもったためである。

しかしながら、保育者と相談するうちに、一斉的な活動は減らしてゆこうという結論に至った。そうした結論に至った過程は複雑であるが、端的に記せば、より A 幼稚園に馴染んだ形で実施した方が、子どもらにとっては得るものが大きいのだろうと考えたためである。普段、一斉に机や椅子を使うことが少ない A 幼稚園においては、そうした形態をとること自体に慣れていないため、せっかくの K 氏の話听不懂の子も出てくるのではないかという懸念が保育者にはあった¹⁵⁾。また、すべての子が文字を書けるわけではないので、途中で困ってしまう子がいたり、話を聞かずに教え合っているうちに終わってしまう子らもいたりすることも想定された。そのため、プログラムを厳密に決めてしまわず、その場の子どもらの反応を見て、保育者が進行の仕方を判断していった方がよいだろうということになった。そうした仕方は、自由な遊びの時間の多い A 幼稚園においては、日常的なものである。筆者は、この結論を支持する一方、実際のところは、初めての実践でプログラムを決めずに大丈夫だろうかという不安も感じていた。K 氏は、上記の内容を了解してくれた。最終的には、最初に全体へ向けてインタビューの実演をし、その後、「しんぶんしゃ」の子らに対して、個別にアドバイスをするというおおまかな流れができ上がった。

そして、11月中旬に、K 氏が A 幼稚園にやってきた。子どもたちには、スペシャルゲストとして読売新聞の方が来ると告知済みであった。K 氏は、子どもたち（全員）の前で、担任の保育者にインタビューをして、すぐさまひらがなで記事を書いてみせた。記録したビデオを見る限り、子どもらは、インタビューの内容にはあまり興味を示していないようだったが、紙に記事を書くことには強く注目していた。特に、記事の内容よりも、記事を書く早さに驚いていたようだった。文字を書く大変さについては、普段の経験から身体で理解しており、その分、K 氏のすごさに注目しやすかったのだろう。その後、保育者が進行役となり、質問タイムを設けることとした。多くの質問が挙がり、中には「新聞は何のためにあるんですか？」という子どもながら本質を付くような質問も出された。K 氏は「伝えたいことがあるからだよ」と答えた。参観していた保育者などの大人たちからは、「おお～」と感嘆の声が挙がったが、その内容が、質問した子自身に理解されたかは分からない。ただ、子どもらにとっては、新聞記者に質問し、答えてもらえるということ自体が、嬉しい経験だったようである¹⁶⁾。時間としては、ここまで40分ほどであった。

そして、全体での質問を切り上げ、K氏が「しんぶんしゃ」へ個別にアドバイスをする時間に移った(図7)。K氏は、図6にあるような子どもらの新聞を見て、(1)コーナーをつくろう、(2)コーナーの名前(見出し)は大きい字で書こう、(3)分担を決めよう、というアドバイスを送った。プロの新聞記者からすれば、みなバラバラに活動しているように見えたので、最初にコーナーを決め、役割を分担し、新聞のスペースを埋めてゆくことが必要だと思われたとのことである。また、見出しを付けることで読む人が読みやすくなるということも繰り返しアドバイスした¹⁷⁾。

この日、K氏は降園の時間まで、昼食を挟んで実質2時間半ほど「しんぶんしゃ」と一緒に活動してくれた。長時間であったが、子どもらも、K氏を囲み、飽きることなく記事を書き続けた。この日に作成した新聞の一部を図8に示す。この新聞は、K氏のアドバイスどおり、見出しが付けられ、ページごとに内容が変わっているという、より新聞らしいと言えるものであった。

また、実践後に、K氏が、子どもらに加え筆者や保育者にも重ね重ね語っていたのは、編集長の存在の重要性だった¹⁸⁾。コーナーをどのように分担するか、誰に分担するか、といったことは、本来は編集長の役割だと言う。K氏は、子どもらの活動をより高度なものとするためには、そうした編集長の存在が必要だと考えた。誰かが全体を見渡し、指揮をとる存在となることで、新聞がより洗練されてゆくだろうということを語っていた。実際、これまでの「しんぶんしゃ」では、みな自由に記事を書いており、いわば寄せ集め的な新聞が制作されていた。この日は、K氏が進んでコーナーを割りふるなど、編集長的な役割を果たしてみせたため、結果としてバラエティに富んだ新聞ができ上がっていた。



図7 K氏と「しんぶんしゃ」の子どもたち

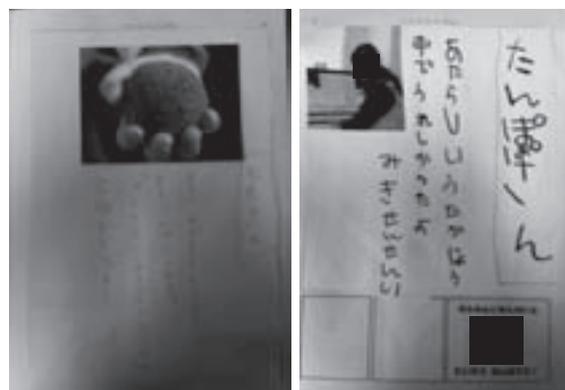


図8 K氏と制作した新聞(一部)

7. その後の「しんぶんしゃ」

その後の「しんぶんしゃ」は、他の「活動」との関連で、地域にある精米店を取材するなど、記事を書く機会に多く恵まれ、年度の終わりまで新聞を制作し続けた。見出しを付けたり、コメントをとったりということは、継続して行われていた。

印象的だったのは、K氏からもらっていた、実際の新聞記者も使っているメモ帳を大事に使い続けていたことである。メモ帳の表紙に、「Tさんからもらっためもちょう」と記

している子ども数名いた。K氏との交流はわずか一日であったが、より本物らしい「活動」を志向していた子どもらにとっては、K氏は憧れの存在だったのだろう。

また、ひとつ特筆すべき点がある。それは、編集長の制度が根付かなかったことである。子どもらの間でも、保育者にも、K氏が編集長の存在が重要だと述べていたことは理解されていた。そのため、何度か編集長役を交代してやるということを試みていた。しかし、編集長役を決めたとしても、結局それぞれが書きたいことを書きたいだけ書くという構図はほとんど変らなかつた¹⁹⁾。記事の分担の仕方でもめてしまうこともあった。そうしている内に、別の「活動」をしながら「しんぶんしゃ」の様子をながめていたある子が、「そんなに大変なの～?」「だったら編集長やめちゃったら?」と言い出したのである。すると、「そうだよ、やめちゃおう」という声が次々に上がり、結局、編集長の制度は子どもらには根付くことなく終わってしまった。それでも、取材し、コメントをとり、必死にメモをし、記事を書くという作業には、熱心に取り組み続けた。

8. 実践についての考察と、今後の課題

この実践を読み解く観点として重要なのは、実社会とのかかわりという観点であろう。

子どもらによる新聞は、はじめはテレビ欄のみであり、実際の新聞とは少々かけ離れたものであった。それでも、テレビ欄をつくろうと思いついたのは、子どもたちが、実際の新聞を日頃から見ているからだと考えられる。そして、「活動」が進むにつれ、取材を試みたり、ロゴや広告を付けてみたりと、より本格的な新聞をつくることを志向するようになっていった。幼児期の子どもの遊びには、いわゆるごっこ遊びが多くみられるが、子どもらのごっこ遊びの中で再現しようとするものは、当然ながら、子どもが普段の生活の中で見てきたものであるはずだ。つまり、幼児のごっこ遊びは、少なからず実社会とのつながりを感じさせるものであるはずなのである。この実践は、実際の新聞の一端を再現し、その再現したものと新聞を比べ、足りないところを付け足してゆく、という仕方で行われていた。新聞という実社会に存在するひとつのものとのかかわりが、「活動」を発展させる要素となっていたと言える。

このように、一見すると単なるごっこ遊びと捉えられるものであっても、活動を継続的に支え、実社会とつながることを促してゆけるのであれば、その活動はごっこ遊びの範疇に留まらないものとなる。そうした援助は特別なものではない。実社会の再現というごっこ遊びの特徴を踏まえれば、本来ごく自然に行えることだと思われる。

また、場合によっては、実社会で働く人との出会いを提供することが、子どもの活動を進めるのに、有効に機能することもあると示唆された。ただし、おそらく、子どもたちが実社会と密にかかわりながらの活動をしていなければ、さほど有効には機能しないだろう。この実践においては、より本格的な新聞をつくろうと苦労していたところに、プロの新聞記者がやって来たということに意味があったのだろう。子どもたちには、普段の「活動」の延長から、「この人の話を聞けば、より本格的な新聞が作れる」という期待があったのではないか。

以上の考察を踏まえると、幼小連携については、幼稚園と小学校が円滑に接続されうるかという観点のみならず、幼稚園や小学校それぞれが、実社会とつながろうとしているの

かという観点も重要であると考えられる。そもそも、「ことばの授業」は、小学生に、実社会での言語技術の使われ方を紹介し、普段学んでいることと実社会とのつながりを意識させるというキャリア教育的な側面をものであった。そのため、「ことばの授業」は小学校以降を対象としたプログラムではあったが、実社会とつながろうとしているという点において「しんぶんしゃ」の「活動」と関連があり、保育実践にも応用してゆくことができたのだろう²⁰⁾。もし、「しんぶんしゃ」の活動が小学校国語科と関連していたからといって、一斉に文字を教え込んだり、新聞の仕組みを保育者から一方的に伝えたりしたのでは、子どもたちのモチベーション向上にはつながらなかったかもしれない²¹⁾。

今後は、幼小連携の仕方について、既存の教科の枠組みでつながるところがあると考えただけでなく、幼稚園は実社会とどうつながりうるか、また小学校は実社会とどうつながりうるか、といった点についても考えてゆかなければならないだろう。教科を媒介とした連携の仕方だけでなく、実社会を媒介とした幼小連携のあり方が模索されるべきである。そのためには、幼稚園、小学校双方の実践を、実社会とのつながりという観点から見直してゆく必要がある。また、これまでの幼小連携についての知見を活用しようとするならば、小学校の教科は実社会とどうつながりうるかといった点について考えてゆくことが、実社会を媒介とした幼小連携探求の手がかりとなってゆくと思われる。そうした意味で、キャリア教育の授業開発に関する種々の知見（藤川、2006）は多いに参考になるだろう。

ただし、実践からは、いくつかの課題も考察される。

第1に、幼児期は発達の個人差も大きく、興味関心も子どもによりまちまちであるという課題がある。幼児期は、比較的、自分なりに好きなことをとことん追求できる時期であり、A 幼稚園でもそういった姿を理想として保育を行っている。そうした背景から、本実践の例のように、新聞制作にのめり込む子には、新聞制作から多くのことを学ばせることができる。しかしながら、すべての子が新聞制作に興味を持つわけではない。また、エピソード中に登場したいわゆる勘のよい子もいれば、そうでない子もいる。子どもの発達の仕方や発想は多様である。従って、活動と実社会とのつながりも多様であると言える。円滑な幼小連携を見据え、現場レベルで具体的にどういった援助が可能かという点については、まだまだ試行錯誤が必要である。

それでも、本実践のように、チームで活動することには可能性を感じることができる。たとえひとりの子が先へ進んだ発想をしていたとしても、その子を孤立させるのではなく、チームとして協力しなければ活動しづらい状況をつくりだすことで、チーム内での学び合いが促されることとなる。そのように考えると、逆に、子どもの発想が多様であった方が、全体としての学びが高められるとも考えられる。具体的にどのような方法が可能かを探ることは、今後の課題としたい。

第2に、実社会のつながりが重要だと言っても、幼児には幼児なりのリアリティがあるという課題がある。具体的に言うと、K氏の言う編集長の存在の重要性が、子どもたちには理解されなかったということである。子どもたちは、確かに本格的な新聞をつくることを志向してはいたが、たとえプロが主張する重要なアドバイスであっても、自分たちに馴染まないものは、「活動」の中には取り入れなかった。この例からはふたつの課題が浮かび上がる。ひとつは、編集長の重要性を理解できないのは子どもの発達段階によるものだと、小学校以降に取り組むべき項目として先送りにするべきか否かという課題である。

もうひとつは、幼稚園段階から編集長の存在を理解できるような働きかけを試みるべきか否かという課題である。これらの課題は、幼稚園によっても、そのときの子どもたちの状況によっても異なると思われる。しかし、どちらの方向を志向してゆくことが、望ましい幼小連携を促してゆくのかということについては、たとえ観念的であっても、常に考えてゆかねばならない。

第3に、本稿では深く考察できなかった点に関する課題が残る。それは、授業プログラムの応用の仕方についての議論である。本実践では、A幼稚園の理念にあう仕方で、プログラムを多少つくり変えた。その仕方が妥当であったのかについては、さらなる議論が必要であろう。本稿における例は、素朴には、小学校向けの授業プログラムを保育実践に応用してたと語るすることができる。しかし、A幼稚園の実践そのものが、一般的な幼児教育の文脈では語り得ないことは、新垣（2006、2008）や阿部（2009a、2009b、2010）の議論から示されている。この課題について考えてゆくためには、A幼稚園独自の実践がいかにして可能となっているのか、また、A幼稚園が他の園の実践や小学校以降の実践に対してどのような示唆を与えうるものなのか、といったことと包括的に考えてゆかねばならない。今後の課題としたい。

以上が、実践から導かれた成果と課題である。本稿における事例は示唆に富んだものではあったが、ここで得られた知見はやはり一事例にそくしたものでしかなく、望ましい幼小連携のあり方をマニュアルのような形で提示するのは早急である。今後も継続して様々な実践を読み解き、幼小連携に関する知見を蓄積してゆく必要がある。

謝辞

筆者の継続した参与観察をいつも快く受け入れて下さるA幼稚園のみなさま、その発想でいつも筆者を驚かせてくれる子どもたち、ご多端にもかかわらず実践に協力して下さった読売新聞社K氏に、この場を借りて深くお礼申し上げます。

参考文献

- 阿部学（2009a）「ある幼稚園における「メディア遊び」の展開についての一考察」、『日本教育工学会第25回全国大会講演論文集』、pp. 729-730
- 阿部学（2009b）「ある自由保育幼稚園における参与観察の困難さについて—観察者が観察できるものは何か—」、『授業実践開発研究』、第2巻、pp. 43-52
- 阿部学（2010）「ある幼稚園における「メディア遊び」のエスノグラフィー—保育者の試行錯誤の過程を中心に—」、『授業実践開発研究』、第3巻、pp. 27-36
- 新垣理佳（2006）「幼児教育における「仕事」の時間のカリキュラム開発—芸術表現活動と経済活動に重点をおいたカリキュラム—」、千葉大学大学院教育学研究科修士論文
- 新垣理佳（2008）「自由保育と課業的な行いのかかわりについて—土粘土での制作活動を例にして—」、『授業実践開発研究』、第1巻、pp. 51-58
- 上野ひろ美（2007）「保幼小連携の課題に関する考察」、『奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』、第16巻、pp. 109-122
- 佐々木宏子・鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園（2004）『なめらかな幼小の連携教育—その実践とモデルカリキュラム』、チャイルド本社
- 田代和美（2008）「自由保育」、『保育用語辞典 第4版』、ミネルヴァ書房、p. 108
- 藤川大祐編（2006）『企業とつくるキャリア教育』、教育同人社
- 森上史朗（2008）「小1プロブレム」、『保育用語辞典 第4版』、ミネルヴァ書房、p. 298

注

- 1) 保育園を含め、幼保小連携という言い方もあるが、本稿で取り上げる実践が幼稚園であり、筆者

- にはその実践がその幼稚園特有のものに思われるため、本稿では幼小連携という表記をする。
- 2) 本文で取り上げた例以外では、「情報交換（懇談会、相互訪問、参観など）」「実践交流（合同行事、合同授業の実施など）」（上野、2007）といった取り組みが考えられる。
 - 3) 第2章「幼稚園教育がはぐくむ生きる力と学力の基礎」に記されている。
 - 4) A幼稚園における「活動」という言葉には、「遊び」であり、また「生活」そのもの」（新垣、2006）という独特の意味がある。
 - 5) NPO法人企業教育研究会ウェブサイト <http://ace-npo.org/>（2010年7月閲覧）
 - 6) 「ことばの授業」に関しては以下を参照。<http://ace-npo.org/info/kotoba/index.html>（2010年7月閲覧）
 - 7) 「インタビューをしよう！」については、以下を参照。<http://ace-npo.org/info/kotoba/index.html>（2010年7月閲覧）
 - 8) 自由保育とは、「子どもの自由は活動を尊重するという保育理念に基づく保育」（田代、2008）として理解されている。しかし、この定義は極めて曖昧である。A幼稚園の実践を読み解くためには、自由保育という言葉はひとつのきっかけとしておき、当の実践のあり方をつぶさにみてゆくことが重要である。
 - 9) 「おうちづくり」は1976年に始まった。きっかけは、新垣（2006）に詳しい。
 - 10) 詳しくは新垣（2006）が紹介している。
 - 11) 本来、メディアとして扱われるものは様々であるが、A幼稚園で「メディア遊び」と言うときには、テレビなどの映像メディアを扱った遊びを指すことが多い。
 - 12) 各学年には、担任の他、1名ずつ「フリー」の保育者が配置される。
 - 13) A幼稚園においては、ひとつの遊びをとことん遊び込むことが望まれている。最終的に、自分の所属する「おみせ」を決め、その「活動」に専念してゆくこととなる。
 - 14) 「インタビューをしよう！」の指導案は、以下を参照。<http://ace-npo.org/info/kotoba/index.html>（2010年7月閲覧）
 - 15) 相談をするうちに、筆者もそのように考えるようになった。
 - 16) 記録したビデオに映る子どもの仕草や表情などから判断した。
 - 17) また、途中、「ただ話を聞くだけじゃなく、その人の思ったことを聞いてごらん」というアドバイスがなされていた。つまり、取材といってもただ闇雲に話を聞いてくるのではなく、取材した人のコメントをとってくるのが重要だということである。
 - 18) 実践中も、数名の子に、「編集長やらない？」と声をかけていた。
 - 19) 大きなイベントごとがあったとき（書くことがたくさんあったとき）は、自然と担当を決めることもあった。
 - 20) 本稿第6章に記しているように、応用のさせ方についてはさらなる検討の余地がある。
 - 21) もちろん、保育者の工夫により、一方的な教授をしながらも、子どものモチベーションを高めてゆくことは可能であろう。